

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

In honour of professor Takahara Osamu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2002-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 治彦, Yamaguchi, Haruhiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/872

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



高原先生のこと

山口 治彦

図書館のような人である。

高原脩先生を評してある人がそう言った。まったくその通りだと思う。

とにかく書物・文献の類を心の底から愛してらっしゃる。二、三、エピソードを列挙すると、学校の行き帰り、授業への移動の最中、重そうなかばんや袋で両手がふさがっていらっしゃるのを何度も何度も目撃した。かばんのなかには、もちろん本や論文がぎっしりと詰まっている。

たくさんの蔵書をお持ちである。さかのぼること十数年、大阪の某公立大学の大学院生であった私は、どういうわけか「高原蔵書」と美しい蔵書印が押された本のコピーをたくさん持っていた。もちろん先生は当時も本学の教授であった。院生の手から手へ、大学の垣根を越えて高原先生の蔵書の恩恵にあずかっていた学生は少なくない。

それから、東京への学会出張の折りには、学会会場と神田古書街との往復運動をかならず続けられていたそうである……

いや、私が言いたかったのは、そのようなことではない。

先生が私にとって図書館のような存在であるのは、その頭脳に収められた蔵書数ゆえのことである。これにはどうあがいても太刀打ちできない。

あるトピックについて先生に質問すると、それこそボタンを押したように、関係する文献をどんどんと口にされる。文献の内容を要約して、論評して下さる。そして、そのときの先生のお顔は、いつも楽しそうである。

しかも、どの情報も正確なのである。一度だけ先生が出典を間違われたことがあったが、数日後にはご丁寧な訂正の書き付けをいただいた。その誠意と記憶力を前に、こちらはまったく頭が上がらない。大変な方である。大学の教員には研究・教育・行政面での貢献が求められるが、教育面における高原先生の貢献はこれをもって推して知るべし。

当然、ご専門の語用論や談話分析において、学会をリードされてきた。ここで多くを語ることは控えるが、1993年には国際語用論会議を神戸に誘致され、大会実行委員長の大役を果たされた。1998年の国際語用論会議では、全体会議での講演を引き受けられた。もちろん、その名誉に見合うだけの研究上の功績があってこそその話である。

では、大学行政における先生の貢献はいかに。1987年度には学生部長をつとめられ、さらには1991年からの3年間、そう、図書館長の要職にあったのである。

教育、研究、行政、どの分野においても先生のはたらきは顕著である。専門を同じくする同業者としては、はなはだ肩身が狭いが、そのような方の同僚であったことを心より有り難く思う。

さて、私には、高原先生が退官されるまでにと心がけながら、果たせなかったことがひとつある。いったい、先生はどのような方法でそれほどまでに大量の文献を読破しているのか？その秘密を探り出すことである。同僚の岡田禎之と宴会の席で先生にお酒を注ぎ合って尋ねてみたのだが、先生はにこやかに微笑まれるだけで、その企業秘密をついに明かしてはくれなかった。

高原先生との幸福な時間を思い返すにつけ、この点についてだけは、少し残念なのである。